

研修報告 日本史サマーセミナー2025 1日目

神奈川県立霧が丘高校 秋田 大地

はじめに

8月20、21日に横浜翠嵐高校において日本史研究推進委員会による日本史サマーセミナーが行われ、今年度のテーマは「歴史総合」から「日本史探究」へPartⅣであり、例年に引き続き、歴史総合のあり方や、歴史総合から日本史探究への接続に関して協議がなされた。1日目である20日の午前の部で日本女子大学の成田龍一氏と、千葉大学の小関悠一郎氏による高校生への講義が行われ、午後の部では講義内容をうけた高校教員によるリプライ、研究協議が行われた。

1 成田龍一氏の講義について

1日目のはじめに「大衆化」のなか、日本の女性は家族をどのように考えていただろうかー「新しい女」と「人形の家」(イプセン)」という題目で講義が行われた。成田氏の講義は、大衆化のもとでのジェンダー論を歴史総合という科目のなかでどのように位置づけるかをテーマとし、「人形の家」に対する『青鞥』(1912年1月)での反応から、当時の人々のジェンダー観念とその形成過程に迫るものであり、現代の我々が経験している「近代家族」を捉えなおす試みがなされた。

まず、成田氏は家族の歴史について触れ、前近代の家族の在り方と、「近代家族」の在り方を確認し、「近代家族」とりわけ「近代家父長制」のもとでの女性の生きづらさに焦点をあてた。その例として、1879年、ノルウェーの劇作家イプセンによって書かれた戯曲「人形の家」を取り上げた。

「人形の家」は「近代化」のもとで作られ、ヨーロッパで大評判となり、日本では1911年、「大衆化」の時代に上演された。青鞥社の人々は「人形の家」を鑑賞し、その感想を『青鞥』に綴った。青鞥社の多くの人物が主人公ノラの行動に共感するなかで平塚らいてうが批判的な感想を持ったことについて、成田氏は「青鞥社の人々の共感の理由」「平塚が批判した理由」

「平塚と他のメンバーのノラの行動に対する評価の相違がもつ意味」を問いの形で表現した。この問いから、青鞥社の多くの論者と平塚らいてうの着目点の相違を生徒に考えさせ、多くの論者が「日本の家」とノラの戦いを想念していたことに対し、平塚らいてうの着目する視点が「近代家族」に対するノラの戦いであり、平塚の着目する視点が他の論者と異なっていたことを生徒に理解させた。

「近代化」のもとで作られたヨーロッパの演劇を、「大衆化」の日本の女性たちによる観方の相違に着目することで、「大衆化」の時代の日本社会の前提となるジェンダー観念を探



らせる講義であった。現代社会の自明の前提でもある「近代家族」の概念を捉えなおすとともに、平塚らいてうの議論を通じて、西洋の近代化と日本の近代化の相関関係や差異を考えたり、現代の様々な家族の在り方と関連付けたりすることができる点で非常に有意義であった。

2 小関悠一郎氏の講義について

成田氏の講義に続いて、小関氏による「「仁政」「明君」とはなにか - 19 世紀日本の政治と理念 -」という题目的講義が行われた。この講義では「仁政」「明君」といった概念をテーマに、豊富な史料から近世日本社会の政治理念と近代日本社会の政治理念の連続性を考察したものであった。また、歴史総合に近世の内容が盛り込まれている意義が明示されている大変興味深い講義であった。

まず、小関氏は明治の初期議会の「富国強兵」「民力休養」といった政治的論点を明示した後、史料をもとに近世中後期の政治的論点を考察させた。近世中後期の政治的論点として「領主のため（御為・御益）」よりも「民のため（民利・民力）」を優先する発想があったこと理解させ、近代の「富国強兵」「民力休養」を読みとくキーワードとして「仁政」「明君」という語句を提示した。

江戸時代には、年貢上納を責務とする百姓に対して、「仁政」による「安民」実現が領主の責務だとする考え（「仁政」思想）が広範囲の人々に共有され、「仁政」「徳治」の理念は為政者が容易に無視できない政治規範として浸透・定着していった。しかし、18 世紀半ば以降領主財政が逼迫すると、君主の徳・思いやりだけでは「仁政」は不可能であり、「仁政」実現のためには「富国」が不可欠という発想が出現し、次第に幕府・諸藩の主要な政治目標の一つとして広く掲げられるようになった。また、それに伴い「仁政」（民の生活安定）と同時に「富国」をも実現した存在として「明君」が描き出されていることにも言及し、こうした状況が、近代日本の「富国強兵」の国家目標化の基盤となったことを生徒に理解させた。小関氏は最後に現代政治を考えるうえでの参照軸として、近世の概念や考え方を学ぶことの重要性について言及した。



近世中後期は近代日本の国家的目標・理念につながる政治理念が、政治・政策論の焦点として浮上した時期であり、「連続性」がみられる。その後の研究協議においても、近代のスタート地点を近世の「仁政」「明君」とするとき、歴史総合において「近世」をどのように総括するのか、など発展的な議論が行われた。

おわりに

成田、小関両氏の講義は、現代の問題を考えるうえでも重要な議論であった。生徒と教員が歴史総合という科目を通じてどのように歴史像を描き、現代の社会をどのように描き出すのか考え続ける重要性を再認識した 1 日であった。歴史教育の役割を絶えず問い続けるために日本史サマーセミナーの意義は今後さらに重要視されていくであろう。

「日本史サマーセミナー 2 日目参観記」

—歴史的な資料の見方・考え方をどう考えるか—

神奈川県立秦野曽屋高校 日戸 勇希

はじめに

2025 年8月 21 日(木)日本史サマーセミナー2日目に参加した。セミナーは以下の日程で開催された。

09:00-10:10 大串潤児氏「ゴジラが来る」

10:40-11:50 富山仁貴氏「アメリカに渡った写真から読み取る近代日本の自然環境」

13:00-15:00 講師の講義 振り返り

15:15-16:45 研究協議

の日程で開催された。

1 ゴジラが来る

大串氏が最後のまとめで生徒に問いかけた言葉が印象に残っている。『歴史』(研究や教科書)は、歴史学者や教師が描く(語る)ものではなく、君たち自身によって新しく描くことができる」と締めくくられた。その前段階として「歴史学」とはどのような学問かという講義があり、この前提知識があるからこそ、生徒の中に歴史の見方・考え方が育つのだと感じた。

講師による振り返り及びディスカッションでは、「総括的単元をどこに置くか」が論点となった。総括的単元とは、生徒の問いの再確認と学習内容の総括を行う単元のことである。大串氏の「ゴジラが来る」というテーマをふまえた授業構想を、藤沢清流高校教諭の生田氏が提案した。生田氏は総括的単元を「現代的諸課題の形成と展望」に設定した。これに対し大串氏は、自身が設定するとすれば、近代化の総括的単元を日清戦争に、大衆化の総括的単元を朝鮮戦争に置くだろうと述べた。

協議の中で成田氏は、ゴジラを深掘りし、現在の私たちとどのように結び付けられるかを示唆した。成田氏は「神の目で歴史を語る時代は終わった」と語った。これは、超越的な視点で歴史を語るのではなく、自身の目線で歴史を数値的・具体的に語る時代の到来を意味している。「神の目」に陥ることなく歴史を考察できるようになることの重要性が伝えられた。

2 アメリカに渡った写真から読み取る近代日本の自然環境

富山氏は自然環境の歴史について扱った。自然環境の歴史を考えるために、「今日の人類社会の大きな課題である“環境問題”を歴史から考える」という授業目標を設定した。富山氏は冒頭、「日本の歴史上、環境問題が始まったのはいつだと考えますか？」と問いを投げかけた。単に問うのではなく、①原始・古代、②中世、③近世、④近代、⑤現代という 5 つの選択肢を用意し、スモールステップを踏むことで、生徒の挙手率も高かったように見受けられた。

歴史資料としての写真の意義について、富山氏は「写真というただの記録が、『自然環境』という視点を介することで、歴史を考える史料になる」と生徒に伝えた。この講義を通じ、歴史的な見方・考え方につながる「視点」を介在させることの面白さを実感した。今回は自然的条件であったが、社会的条件など他の視点へ視野を広げることも可能だと感じた。

講師による振り返り及びディスカッションでは、環境史をカリキュラム上のどこに位置付けるかが話し合われた。「歴史総合」の大項目のまとめとして「〇〇化と現代的な諸課題」に取り組む際、環境史は「開発と保全」に関連するが、「日本史探究」には該当箇所が見当たらない。「現代の日本の課題と探究」で環境史を扱うことは可能だが、単元の最後にあたり非常に扱いづらい点が指摘された。足柄高校教諭の桐生氏は、歴史分科会史跡踏査委員会でのフィールドワークの経験から、資料の閲覧だけでなく、イメージを具体化するためにフィールドワークを実施する重要性を示唆した。

おわりに

本セミナーでは「歴史総合」における見方・考え方が論点となった。研究協議において大串氏、富山氏、成田氏に共通していた見解は「歴史総合は通史でなくても良い」ということである。資料から何を引き出せるのか、そしてそれを引き出すために生徒にどのような問題意識を持たせるか、こうした教師としての視点が必要であることが確認された。

参加者の意見としては、「問いのクオリティを高める必要がある」「技術的にどのように実現するか」などが挙げられた。現実的にカリキュラムへどう組み込むか、今後の課題が浮き彫りとなった。

日本史サマーセミナー2日目の様子

